

さんこう昔話文庫

第1話 蛇 塚

中津市三口の大井手井堰から南1キロメートル、山国川の右岸寄りに、水位の変化によって、かなり広く川底の隆起が見られる。「明治30年代までは岸と陸続きで、一面に草が生い茂り、草刈りにいった」という。永い年月の間、洪水のたびに岸は削り取られ、島になってしまった。その島も次第に洗われて水中に没した。

ここは鶴市神社ゆかりの地でもある。「鶴市宮御縁起」によると、お鶴・市太郎の悲話について、「湯屋弾性の発言を以って、袴を水に投げ入れ、その先に沈める袴の持主を人柱に定むべきこととし、7人共に水口より遙か南に小島崎という所に行きて

立ち、各々袴を脱ぎて水に入れれば、しばらく浮きて流れけるが、不思議や湯屋弾性打粥の袴こそは、水底に沈みける伝々」とある。この小島崎がこの島である。蛇塚ともいう。



この岸にはお宮があった。今でも下宮という。30年ぐらい前まで御神木が残っていたが、落雷のために幹が引き裂かれ、その一部は川に朽ち落ちた。ここには多くの蛇が生息していた。

こんな話がある。佐知に住む釣り好きの人が、ここで魚を釣っていたが、横の方でガサガサと音がする。ヒョッと見ると、御神木の枝から胴回りが30センチメートルもあるかと思われる蛇が向って来ている。びっくりして、そのまま釣道具も何も捨てて家に帰り、寝ころんで高熱にうなされた。その後は三度の飯よりも好きだった魚釣りをやめてしまった、という。

さんこう昔話文庫

第2話 和与石

(八面山縁起より)

大宝元年（701年）八幡大菩薩が衛生済度のため如意宝珠（一切の願いごとがかなえられる）を英彦山権現より賜ろうと思い、宇佐の小倉山から英彦山に行った。そこへ法蓮（八面山開基の僧にあって、当時英彦山で修行）が来て「私はまだ宝珠を見たことがない」という。権現が珠を見せようと法蓮の前に置くと、八幡に奉仕する翁が出て来て珠は私に渡してほしいといって、欺いて持って逃げたので法蓮は大変怒り「諫山郷南の高山（箭山）まで追いかけて大菩薩を大声で問責するとその声が伊予（四国）石鎚山まで聞こえた。大菩薩は金色の鷹となり金色の犬（翁）を召しつれて飛んで帰って来た。そして八面山の大きな岩の上で話し合った。「私は八幡大菩薩である。私に宝珠を渡すなら、宇佐に乗○のときは、神宮寺別当に任ぜよう」というので法蓮は和与（和解）した。そして八幡は永く宝珠を得ることができ、法蓮も神宮寺の別当となった。この話しあいをした大きな岩を和与石と呼んでいる。



第2話 和与石

(三光村誌より)

八面山の和与石のことを、地元では和号(わごう)石・評定(ひょうじょう)石と呼んでいる。この石には、八幡大菩薩と法蓮の伝承があるが、次のような話もある。

大昔、箭山の神とヌーバル（十文字原）の神がいて、二人は仲が良かった。ある日ヌーバルの神が箭山に来了。二人は大石に腰かけて、今まで共同所有していた石と湯について、どちらがどれを取るかということで評定した。ヌーバルの神は、地元の箭山の神に「あなたから先に」というので箭山の神は石を取った。



ヌーバルの神は、石が欲しかったのであるが、仕方なく湯を取った。こんなことがあってから、ますます二人は和合の渡を深めていった。その時腰かけた石がこの和与石であるという。現在、八面山に巨石が多く、別府に湯が出るのは、二人の神の評定が基になっている、という。

さんこう昔話文庫

第3話 馬の石

湯屋文書の「鶴市八幡宮由来根元記」によれば、「三口の井手より遙か川上に、満留石^{みつるいし}という2つの巨石がある。速秋津彦・速秋津姫の二神がこの石に出現した。その時、清波良男人(きよはらのおびと)という人が、この神を尊敬し、衰微したお社を再興した。ある夜、加良須男人(からすのおびと)は、「二神が龍馬に乗り、満留石の上に降臨した」夢を見た。加良須男人は、満留石に行って伏し拝んだ。すると夢のとおり、日月が光り輝くように、龍馬に乗った二神が現われた。加良須男人は、水道神となってお社を造立した。この満留石というのは佐知の馬の草にある」という。

佐知の川原のマノクサ（魔の草・馬の草）にあった「馬の石（別名夫婦石）」は、東にあるのが男石で長さ5メートル、西にあるのが女石で長さが4メートル、高さは共に3メートルを越す花崗岩の巨石である。七所神社の神石として住民に尊崇され、子供の遊び場ともなっていた。ある時石工が、この石を割ろうとして、何か所かに穴をうがった。ところが穴から急に血を吹き出し、石は一昼夜呻吟し、付近の住民は眠れなかった、という言い伝えもある。

この石は、昭和15年8月の福岡県側の河川工事のため、男石が破壊され、女石も昭和30年ごろ破壊された。



【写真：ぶらり八面山より】

割られた「馬の石」の片方は50年の歳月をかけ10km下流に流された。

さんこう昔話文庫

第4話 積み石

箭山権現石舞台の上に2個の大石が載っている。地元では「積み石」と呼んでいるが、これについて、【八面山に腰かけた大男】以外に次のような話も伝わっている。

昔、ウウヒト（大きな人）という人がいた。夏のある日、あちこと廻っているうち昼になった。「これはいい場所があった。ここで昼飯を食べよう」と腰かけたのが八面山であった。左足を金色の山に、右足を仮宮と小倉谷の間の山にふんばった。金色の山にはその足跡だという窪みがあるという。ウウヒトは、弁当からむすびを取り出して食べはじめた。するとむすびの中に石が混じっていて、噛んでしまった。石は二つに割れて、一つは歯にはさまった。はさまった石は大平山の木を引き抜き、楊枝にして取り除いた。石舞台の上にある二つの石は、このウウヒトが口の中から取り出して置いた石だという。

飯を食べ終わったウウヒトは、周防灘の水を口づけにして飲んだ。飲み終わって「あゝうまかった」と腰を伸ばし空を仰いだ。その途端、天に鼻を打ちつけ息絶えてしまったそうである。



さんこう昔話文庫

第5話 高丸様

天正年間（1573～1590）黒田官兵衛孝高が豊前六郷の大名となつたころの話である。黒田孝高は、半黒田勢力の制圧にのりだした。そのころ佐知に高丸様という豪族がいた。高丸様は上方の方から来た豪族で、小高い所に豪邸を構え、多くの土地を所有し、大庄屋的存在であつた。高丸様は、孝高の政策に服従しようとしないので、孝高は追手を差し向け、逃げる高丸様を斬った。

もう一説には、高丸様は役人として赴任して来て、人びとの信任が厚かつた。高台の豪邸に住んでいたが、次第に下層農民の嫉妬するところとなり、遂に数人の農民により撲殺された、という。

高丸様の遺体と遺品を埋めた、といわれる高さ1メートル、広さ8畳敷ぐらいの塚が、故安藤円治所有の田にあつた。住民はこの塚を「たかまるさま」・「こうまるさま」と呼んだ。圃場整備の時、お祓いをして壊した。この付近は今でも高丸(こうまる)という小字名で呼ばれている。

さんこう昔話文庫

第6話 足たけ山

八面山のしょうけのはなの南側に、足嶽(あしたけ)という山がある。地元では「足たけ山」と呼んでいる。この山は大昔京都にあって、その秀麗さと高さを誇り、ひとり悦に入って傲慢な態度であった。

何年か経ったある日、「西の方遙か筑紫の国に、八面山という山があって、高く雄大な姿は皆から崇められている」という噂が伝わって来た。「そんなことはない。わしより高い山はないはずだ」とその傲慢さを顧みようとしなかった。しかし、噂は広がる一方である。内心おもしろくないこの山は、「それでは行って確かめよう」と家来を一人連れて天空高く飛び上がり、一晩のうちに飛来して、八面山の南側に降り立った。そして八面山のしょうけはなを見ると、自分より遥かに高く、いくら背伸びしても追いつかない。

今までの傲慢さは空高く消え去り、嘆息の日が続き、京都に帰る元気もなくなった。そこで八面山と仲よくすることを誓い、家来と共にそのまま居据わった。その高さが、八面山の足の丈しかなかったことから、「足たけ山」というようになった、という。今も主従が八面山に向って並んでいる。

さんこう昔話文庫

第7話 箭山太郎

大昔、八面山に数千年を生きたという老夫婦が住んでいた。二人の間に箭山太郎という一人の息子があった。老夫婦はこの太郎に早く嫁をもらい、自分たちの死後、この山を守ってもらいたいと願っていた。太郎は身長一丈（3尺）余りあった。太郎は狩をよくした。ある日、狩に出たが、その日に限って兎一匹取れなかった。歩きまわっている内に佐知の川原まで来ると、水浴びしている一人の女の姿を発見した。その美しさは太郎の心を射た。嫁にもらうならこの女だという衝動にかられ、女の前に跳び出して行った。女はびっくりして佐知の集落に逃げ込んだ。

その夜、太郎は髪をとき、ひげを剃り、夜の更けるのを待ち、箭山を下りて佐知に向かった。女の住居を見つけた太郎は、戸のすき間から眺めると、女が静かに眠っているのを見た。太郎は高鳴る胸を意識しながら寝顔を見守っていたが、やがて荒々しく戸を引き開けて中に入り、驚く女を小脇に抱えて箭山へ帰って行った。こうした略奪結婚によって、太郎は佐知姫と結ばれ、両親の死後も二人は力をあわせて山を守ったという。

さんこう昔話文庫

第8話 沙地翁物語

今からおよそ1250年前、山国川が御木川(みきがわ)と呼ばれていたころ、上流の山国地方には大森林が繁茂していた。この木を農民は伐り出し、筏に組み、大きいものはそのまま御木川に流して中津まで運んだ。途中に3か所の難所があり、その一つが土田の「兎飛び」である。ここは兩岸壁が接近して急流となり、木流しには危険であった。農民はこの難所を越すと一安心して、この付近で一夜を明かす。

ところがこの農民を待ち受けて、運んで来た木材を奪う盗賊が出没し、手向う者は殺してしまうこともあった。盗賊は付近の集落を襲っては牛や鶏を盗み、若い娘をさらった。

そのころ、百歳を越したかと思われる沙地(さち)翁(おう)という老人が住んでいた。頭髮やひげは真白であったが、壮者をしのぐほどの元気者で、この地方の「かしら」として、人びとの尊敬を集めていた。弓術にたけ、3つ向うの山を走る鹿も射止めるほどであった。

翁は盗賊の横暴を聞き、平定せねばと心に決め、ある朝、住民たちを集めて決心のほどを伝え、今夜行くが、もし明朝まで帰って来なければ、わしに代わって勇山(いさやま)の麻呂がこの地を治めるようにと告げ、人びとの止めるのも聞かず出発した。何とか殺さなくて説得し、真人間になるように改心させる方法はないか、と思いながら盗賊の住む岩穴に着いた。盗賊たちは翁を殺そうと走り寄って来た。翁は今はこれまでと、弓に矢をつがえて放った。矢は先頭と次の者の衣を縫いあわせてしまった。すると不思議に、この矢から急に銀白色の光線が放たれ、かすかなうなりさえ生じた。盗賊は目がくらみ、坐り込んだ。翁は彼等の所に行って、その非を論した。

改心した賊は、筏に乘せられて下流へ送られることになった。筏が岸を離れようとした時、銀白色の兎が現われ、翁に向かって「私は古くからこの地に住んでいる守護神である。あなたの愛郷心に感応して、あなたの射た矢に加護を垂れた。あなたはこの地を治めなさい」と告げて、御木川を飛び越え、求菩提山(くぼてさん)の方へ去って行った。「兎飛び」の名はこれから起こったという。



さんこう昔話文庫

第9話 しょうけん鼻

八面山の頂上を「しょうけん鼻」と呼び、百メートルを超す絶壁がきり立っている。

昔、ここに大鬼がいて、その体は雲表にそびえていた。毎日何もせず、ぶらぶら歩き回っては手当たり次第に人間の生き血を吸うので、人々は安心して暮らせなかった。

それを見かねた薦八幡の神は、何とかしてこの鬼を退治しようと思い、いろいろ思案をめぐらし、ある日、鬼を呼んだ。八幡の神は「三角池を一夜のうちに掘れ、掘ったら何でもお前の望みをかなえてやろう。もし掘れなければどこかへ退散せよ」と言った。鬼は「たやすいこと。必ず掘ってみせる」と約束した。

鬼は神との約束を果たそうと、休む暇もなく、一生懸命掘った。そのかいあって、明け方近く掘り終わりそうになった。

これを見ていた神は「これは困った。なんとかせねば……」とあせり始めた。思案の末、夜の明ける前、鶏の勝どきのまねをして夜明けを告げた。

一生懸命掘っていた鬼は、これを聞き、「ああ、オレの負けか」と言って、池掘りに使っていた大きなしょうけ（竹かご）を空高く投げ上げ、いずこともなく消え去った。しょうけは、ひらひら舞いながら落ちて、八面山の頂上にひっかかった。

このことから「しょうけん（の）端（鼻）」と呼ぶようになった。

鬼がいなくなっても、長い間いじめられてきた人々は、またいつ現れるか分からない、と不安であった。

薦八幡の神は、自分との約束を人々に知らせた。それから人々は安心して暮らすようになったという。



さんこう昔話文庫

第10話 和氣清麻呂の猪物語

神護景雲3年（769）、弓削道鏡(ゆげのどうきょう)は、勅使和氣清麻呂の宇佐神宮の神勅によって、皇位踐祚(せんそ)の夢を絶たれる。怒った道鏡は清麻呂を大隈（現在の鹿児島県）に流すが、清麻呂はその途中、再度宇佐神宮に立ち寄ろうとして、八面山麓の加来村まで来て足を悪くした。

療養している清麻呂に、命をねらう道鏡の刺客が近づいている、という知らせが届いた。動けないでいる清麻呂のもとに、箭山(ややま)から三百頭のイノシシが現れ、清麿を乗せ、宇佐神宮まで案内すると、八面山に帰っていった。イノシシの入った地に社を建て、清麻呂を祭った。それが猪山(ちょさん)八幡社で、その跡地が上田口の猪山にある

和氣清麻呂を祭る京都の護王神社の拝殿前には、狛犬のかわりに猪の雌雄が相對峙している。全国に8万余りの神社があり、ア・ウンの相をした狛犬はどこでもよく見られるが、猪が對峙しているのは護王神社1社のみである。

明治32年亥の歳発行の十円紙幣には、表に清麻呂、裏にイノシシの絵が印刷されている。こんなことからこの十円札は“イノシシ”と呼ばれ価値は高かった。このイノシシが八面山のイノシシであるという。



護王神社 <http://www.gooujinja.or.jp/>

さんこう昔話文庫

第11話 八面山に腰かけた大男

大昔のことである。この地方には八面山を根城とする悪魔や怪物が、数限りなく棲息していた。人びとはこれらの危害に恐々として暮らしていた。ところが人びとを守護し、その繁栄を願う神は、悪魔どもを退散させて平和な理想郷づくり出そうと、手を尽くして努力を重ね、悪魔どもの懐柔策を図った。しかし策はすべて失敗し、悪魔はますます威を振い怪物はいよいよ横行を極めるといふ有様であった。

悪魔を撤退させ、怪物の消滅をはかるには、神の力が強大・絶対で、悪魔に勝ることを大いに誇示宣伝する必要があると思った。そのため神は、上半身は雲表にかすんで見えるほどの大男に化身し、眼下には八面山を見下し、ノッシノッシと地響きをさせながら帰山すると、金色と仮宮の両集落に足を踏んばり、八面山に腰をおろし、腰に結んだにぎり飯の包みをといて食べはじめ、時々腰をかがめては、山国川の水をすくって飲んだ。おもむろに立ち上がると、「サアこれで腹もできた、これから悪魔どもを一人残らずヒネリつぶすか」とつぶやきながら辺りを見まわした。

ひそかに見ていた悪魔どもはびっくりして、「とてもかなわぬ」と早々にいずこともなく逃げてしまった。それからは、この地方も平和が続き、人びとは安心して生活できるようになったという。

金色と仮宮の両集落には、この時の神の足跡と伝える相当広いくぼ地があり、にぎり飯に混じっていた石を出して積んだという巨大な石が営林署管轄の松林中（のちに林道開設で発見され、当時の平松大分県知事によって【箭山権現石舞台】と命名された石の上）に2個あって、現在も「積み石」の名で呼ばれている。

